

## 研究ノート ドゥルーズ派の宗教実践の中の輪廻—「聖なる天蓋」を手掛かりに—

井森彬太（河北外国語学院日本語学部 講師）

※本稿は東京外国語大学に 2021 年 1 月に提出した未発表の修士論文「イスラエルのドゥルーズの『世俗化』—セクトからデノミネーションへ」に、第 4 章を中心に加筆修正を加えたものです。

### 1. はじめに

本稿で取り扱うドゥルーズ（ドゥルーズ派）<sup>1</sup>とは、東アラブを中心に全世界で 100 万人程度の信者を有する宗教集団である。

ドゥルーズは、イスラーム教シーア派の一派である、イスマール派の文脈から 11 世紀に生まれた集団である。ドゥルーズは、イスラーム教から派生し、神を「アッラー」とアラビア語で呼ぶ一神教徒の集団ではあるものの、イスラーム教の主流派であるスンナ派とは多くの点で異なる。相違点は、厳格な信徒同士での単婚制を取り、外部からの改宗者を受け入れないことや、メッカ巡礼やラマダーン月の断食を行わない点など多々あるが、特に目を引くのが輪廻転生の教義を持つことである。

この「輪廻転生」の教義を持つことから、過去すでに滅びた宗教であるマニ教との類似性を指摘されることもある。マニ教は 3 世紀にマニによって創始された宗教であり、キリスト教神学史上最も重要な人物の一人とされるヒッポのアウグスティヌスも若いころ入信していたことで知られる。

マニ教は神やイエス・キリストの存在を信じるなど、部分的にキリスト教と世界観を同じくしていた。しかし、物質世界は全て悪であり、靈魂は善の成分を含んでいるという教義を持ち、物質世界にとらわれた人間は地獄に転生し、断食や齋戒を通し物質世界から自らを遠ざけることで天に至ることができると考えていた。そして、物質世界を否定するがゆえに、王や皇帝といった為政者の権力もまた悪の体現と見做していた。それが一因となり、多くの迫害を受けた。ヨーロッパでキリスト教が主流の宗教となった後、中央アジアを中心に宣教活動が行われたものの、13-14 世紀ごろにほぼ完全に消滅した [加藤九祚 1993, 246-257]。

このマニ教とドゥルーズは、ともに一神教であり輪廻転生を信仰するという点では共通点を有する。しかし、マニ教は滅びたものの、ドゥルーズのコミュニティーは存続しつづけている。

その理由は、マニ教とドゥルーズにとって、輪廻転生の教義が世界の意味づけに関して有

---

<sup>1</sup>「ドゥルーズ」は「ドゥルーズ派」あるいは「ドゥルーズ教」と表記されることが多い。前者はイスラーム教の一派であるというニュアンスを含み、後者は独自の宗教であるというニュアンスをとっている。筆者はこの点については判断を留保したいと考えているため、本稿内では「ドゥルーズ」と表記している。しかし、フランスの哲学者のジル・ドゥルーズとの混同を防ぐため、タイトルのみ便宜上「ドゥルーズ派」と表記した。

する意味が異なることにあると考える。このことを、アメリカの宗教社会学者であるピーター・L・バーガーの「聖なる天蓋」を手掛かりに考察していきたい。

## 2. 諸宗教と神義論

本稿では初めに、世界の意味づけに欠くことのできない重要な意味を持つ神義論とその諸文化・宗教での役割を紹介する。そして、ドゥルーズの輪廻転生の教義が世界の意味づけとどうかかわりあっているのかを検討する。

神義論は、元来はキリスト教神学の用語であり、善で全能である神がなぜこの世に悪の存在を許すのかを解き明かす理論である。しかし、宗教社会学の文脈ではより広い意味で使われ、抽象的で多くの人々に理解の難しい神学的な思弁のみではなく、より民衆レベルで広く流布している信念に着目する。宗教的な諸観念の中でも、神義論が人間の行為および社会に与える影響が非常に大きいことを初めて論じた社会学者はマックス・ヴェーバーである。

ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教等の宗教では、一つの神が世界を支配していると考えている。また、インドの宗教では一種の非人格的な法則が世界を支配しているとする宗教もある。

しかし、そのような宗教的観念の中では、神や法則は完全であるはずなのに、この世はなぜ不条理で不完全であるのか人々は疑問に思うようになる、とヴェーバーは論じた。そのため、その答えを提示する神義論を人々は必要とするようになる。ヴェーバーは「この問題はいたるところで、宗教的發展や救済要求などの規定根拠のうちになんらかの形で含まれているのである」と指摘する [マックス・ヴェーバー 1976, 177-178]。ヴェーバーは、神義論がどのような観念と結びつくかが、人間の行為に影響を与え、大きく人間の歴史を動かしたと主張した。

この「神義論」は不条理に意味を与えるものであって、必ずしも救済を与える内容である必要があるものではないことは留意する必要がある。ある人間の苦しみに意味を与えるものの、特にその苦しみに褒賞があると説かない神義論も存在する。後述する聖書的・被虐愛的な神義論はその事例である。

ヴェーバーの影響を受けた社会学者であるピーター・L・バーガーは、すべての規範秩序は悪や不条理で破壊されうる危機にさらされていると主張した。そのため、マックス・ヴェーバーの議論に依拠しながら、悪や不条理を規範の枠組みの中で説明する神義論は、規範の信憑性、ひいてはコスモスを維持するために核心的に重要なものであると主張している。

それぞれの神義論は、社会を保守的な方向性に導かせることもあれば、革新的な運動に結びつくこともある [ピーター・L・バーガー 2018, 96 - 145]。

以下、主にバーガーの『聖なる天蓋』二章の議論に依拠しながら、代表的な神義論を紹介する。なお、これらは純粹に諸宗教の神義論を比較するために作られた類型である。現実の宗教はより多様な観念が混淆しており、以下に述べる様々な類型が混ざった形で現れることは留意する必要がある。

#### a. 社会に対する個人の同一化

古くからある素朴な神義論として、「社会に対する個人の同一化」が存在する。個人に比べて社会集団ははるかに長く続くとみなされる。そのため、自らが社会集団の一部であると観念できれば、個人的な死や老いによる苦しみがあったとしても、自分自身が長く続く集団の歴史の一部として生き続けると観念できるようになる。

#### b. 神秘主義

あらゆる宗教の中に、神や神的な力との合一を目指す神秘主義が存在する。神秘主義は個人が神的なものや神と一体となることで、あらゆる個人性が消滅することをめざす。そして、神秘主義者はすべてのものを神に結びつけて理解するようになり、すべては神に結びついていくがゆえに善であると観念するようになる。ここにおいて、個人の苦しみはないものと捉えられるようになる。

#### c. 輪廻転生

インドの宗教のように、輪廻を前提とし、現在の幸福や不幸をすべて過去の自らの行為の結果と捉えることもできる。ウェーバーもバーガーもともに、このような神義論は社会の現在の階層を正当化するものであり、あらゆる神義論の中で最も保守的なものであると主張している [ピーター・L・バーガー 2018, 118] [マックス・ウェーバー 1976, 186]。

#### d. 救世主の到来

メシア運動に見られるように、悪しき世界がメシアによって打倒され、現世が不条理のない国家になることで、この世の不条理が改められるという運動もある。歴史上の代表的なものとしては、中国の太平天国の乱や、スーダンのマフディーの反乱がある<sup>2</sup>。

#### e. 来世での報い

現世で悪行を行うも厚遇を受ける人間が来世では罰され、現世で善行を行うも不遇な人間が来世では報われると説く宗教も数多く存在する。来世に報酬を求める類型の方が、現世に報酬を求める類型よりも世界の現状に対して保守的である。なぜならば、来世に正しい報いがあると信じることで、現世が不完全な世界であることは容認しうるものになるからである。

#### f. 善悪二元論

「はじめに」で取り上げたマニ教、あるいはキリスト教グノーシス主義のように、この世の秩序を破壊する現象を悪の側に、この世の秩序を支える側を善と想定することもできる。多くの場合、人間の肉体を悪の側、霊的なものを善の側に置くため、結果として現実の世界で起こる出来事と救済を全く結びつけない態度へと帰結した。

#### g. 聖書に見られる被虐愛的な態度

これが西欧を主に分析対象としたバーガーが最も重要視した神義論であるが、聖書にみ

---

<sup>2</sup> 現代日本の例としては、世界最終戦争であるアルマゲドンによって世界が改められると説いたオウム真理教の運動もこの類型に入るだろう。

られるような被虐愛的な神義論も存在する<sup>3</sup>。バーガーは「ヨブ記」を事例として、聖書において神の権威があまりにも巨大化し、それに比べて人間の行為はあまりに小さなものと描かれているとする。「ヨブ記」の中では、神の義について疑うヨブは、神を疑う権利そのものを神によって否定されてしまうのである。そのような被虐愛的な神義論は、一部の宗教的達人のみにしか維持することが難しく、一般大衆はより和らげられ受け入れやすい神義論を信奉する<sup>4</sup>。

以上がバーガーの「聖なる天蓋」第二章に示された神義論の類型の概略である [ピーター・L・バーガー 2018, 96 - 145]。ついで、ドゥルーズの神義論を検証し、ドゥルーズにおいて神と神による救済がどのようなものと見做され、それがどのような観念と結びついているのかを検証したい。

### 3. ドゥルーズの神義論と輪廻転生<sup>5</sup>

ドゥルーズの信仰箇条の第六と第七は「神の意志に満足すること」及び「神の意志に服従すること」であり、たとえどんな出来事であっても神の意志にすべて服従するべきとされる。

聖者にまつわる伝承ではそのことが推奨される。ドゥルーズで最も崇敬される聖者の一人で、通常「アミール・サイード」と呼ばれるアミール・サイード・ジャマルッディーン・アブドゥッラー・タヌーヒーという名の人物がいる。アミール・サイードの一人息子は 20 歳で、婚礼の当日に亡くなったと伝えられる。アミール・サイードは弔問に来た客に対し、神を賛美し、感謝してクルアーン牝牛章 150 節から 151 節「勿論我らは一寸こわい目に合わせたり、飢えで苦しめたり、また財産、人命、収穫などの損傷を与えたりして汝らを試みることにはある。が、お前は忍耐強く堪えている者どもには喜びの音信を伝えてやるがよい。つまり災難に襲われた時『まことに我らはアッラーのもの。我々はやがてアッラーのお傍に還らせて戴ける身』と口ずさむ人々には」と唱えたとされる (Abu-Izeddin. N. M 1993, 175)。

この態度には、神の意志であればすべて人間にとって望ましくないものであっても静かに受け入れるというもので、バーガーの「聖書的・被虐愛的な神義論」の類型に沿うものである。しかし、ヴェーバーもバーガーも指摘している通り、多くの一神教徒にとって被虐愛的な神義論は、一部の宗教的練達者にとってのみ受け入れられるものである。ドゥルーズにとっても例外ではなく、多くの人々は輪廻転生の教義があることを根拠にした、より受け入

<sup>3</sup> 神義論に関連するウェーバーの著作で最も有名なものは、ピューリタンのカルヴァン主義に基づく神義論が欧米で資本主義を生み出す原動力であると主張した「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」である。ウェーバーも同様聖書の神義論を重視したが、バーガーはウェーバーの関心がカルヴァン主義にのみ限定されていたことは「奇妙なこと」と指摘する [ピーター・L・バーガー 2018, 135]。

<sup>4</sup> 聖書に見られるような被虐愛的信仰が一般大衆には維持しがたいという点において、ヴェーバーとバーガーは同じ見解を採っている

<sup>5</sup> アラビア語では輪廻転生はタカムス(نقمص)と表記される。これはアラビア語でシャツを意味するカーミスと同語根であり、「服を着替える」ということと同様のニュアンスを持つ。

れられやすい神義論を採用している。

シリアのドゥルーズの研究者である Abu-Izeddin は、ドゥルーズの世界観では人間の魂は世界のはじめに創造され、常に数は一定であるとする<sup>6</sup>。そして、ドゥルーズが死ぬと、別のどこかの場所でドゥルーズの子供として生まれ変わる。最後の審判まで続く長い輪廻転生の中で、人間は、幸福な人生や不幸な人生、豊かな人生や貧しい人生、健康な人生や病気の人生をそれぞれ経験する。魂はそれぞれの環境で、自由な意思のもとで、自らの魂を向上させる機会を与えられる。それゆえに、神は正義であるとする (Abu-Izeddin. N. M 1993, 117)。同様の見解はレバノンのドゥルーズの研究者の Makarem も述べている (Makarem 1964, 55)。また、レバノンのドゥルーズの長老である Sami Abi Mana や Salman Misry もインタビューで答えている (Al Arabiyya 2015)。

この発想は、最後の審判をいずれ人間は受けなくてはならないことを前提に、善人に褒賞が与えられ、悪人に罰が与えられることを想定している。ここからは、来世に報酬を求める類型の宗教であるとみることも出来る。しかし、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教のように、現世の生が終われば直ちに生まれ変わるという信仰は持っていない。現世から最後の審判の間には、きわめて長い間輪廻転生が続くと考えられている。それゆえに、実際にはドゥルーズの信徒が世の終わりと最後の審判を意識することは少ない。

ドゥルーズ間での輪廻転生思想からは、バーガーが類型化した「インドの業の教義」と同様に、前世の行為の結果として現世が存在するという見解も導くことができる。ドゥルーズは神学的には、現世における幸不幸は部分的に前世の行動の結果でありうるものの、現世で高い身分にあることが、精神的に高い段階であることを意味しないという立場を採っている (Makarem 1964, 56)。これによって、さきほど紹介したバーガーの神義論の中の輪廻転生の教義と異なり、社会的に高い層にいる者が宗教的にも高い段階に固定されることはない。その理由は2つあると考える。

第一に、現世の行動が前世によってすべて決定されているという見解を採ったとしたら、それは神の全能の教義と必然的に矛盾してしまう。自身を一神教徒とみなすドゥルーズはそれを受け入れることができなかつたと考えられる。

第二に、そのような見解は必然的に宗教的・社会的に劣位に置かれた層と、優位に置かれた層の分断を生む。劣位に置かれた層は、必然的に外部で圧倒的に有力な宗教であるイスラーム教スンナ派に転向する動機付けが高まることは間違いない。そのような分断が起こることは、少数派集団であるドゥルーズには望ましくないと考えられたのだろう。

輪廻転生の教義は誕生や葬送にまつわる伝統的な成語にも息づいている。ドゥルーズの村落では、死にゆく人に対して「あなたの母はあなたを妊娠しています」と、いつか再会することに期待する言葉を述べる (W. S. Oppenheimer 1980)。そして、幼児が生まれたときには子供の誕生を祝うとともに、「神よ、向こうの悲しんでいる人達をお助け下さい」と言う

---

<sup>6</sup> この際、ドゥルーズではない魂も神によって創造され、以後各自の信仰の枠組みの中で輪廻転生を繰り返すとされる。

習わしがある [宇野昌樹 1996, 102]。これらの言葉は、人は死ぬとともに、魂が離れ新たな肉体に宿るという観念を前提としたものである。

輪廻転生の世界観で現世や来世が存在することを示すことで、現実世界に存在する貧富の格差や幸不幸の差を説明している。実際の事例では、現代のイスラエルのドゥルーズの間では幸不運が、来世あるいは前世からの「借り」として語られることがある (Nigst 2017, 64-65)。

また、同時に親しい人を亡くした遺族に、亡くなった人物がどこかでドゥルーズの家のこどもに転生して生き続けている希望を与えるものでもある。そして、ある家の子供が他の家で亡くなった人物が転生したものと認められることも、しばしばある。

そして輪廻転生の教義はその論理的な帰結として、ドゥルーズに属する個々人は、他のドゥルーズが過去または未来に家族であったかもしれないと考える。これはドゥルーズの集団への帰属意識を強め、自らと集団全体を多かれ少なかれ一体化させる役割を果たす<sup>7</sup>。これはバーガーの「社会に対する個人の同一化」の類型に当てはまる。

この輪廻転生への信仰は、イスラエルを対象にフィールドワークを行った研究 (Halabi and Horenczyk 2019) であっても、シリアを対象に行われた研究 [宇野昌樹 1996] でも、レバノンを対象に行われた研究 (Littlewood 2001) であっても報告されている。つまり、この輪廻転生の教義は、一部の限られた宗教的専門家の神学的思弁だけの問題ではなく、国を超えて多くのドゥルーズに世界を秩序づけ、説明する役割を果たしている。

輪廻転生は、現代でもなおドゥルーズのほとんどが受け入れている世界観だ。イスラエルの事例を挙げると、Halabi は 50 人の 21 歳から 30 歳の大学生に対して一時間のドゥルーズのアイデンティティーに関するインタビューを行っている。その中で、インタビュワーの側が一切輪廻転生に関する設問を設けず、直接輪廻を信じているかどうか聞くこともなかった。それにも関わらず、50 人中 30 人が自らのアイデンティティーにとって輪廻転生が重要だと答えた。

例えば Rim (仮名) は、「輪廻は私のアイデンティティーにとってとても重要だ。私はこの宗教でもっとも重要なことは輪廻転生だと考えている。それはすべてのドゥルーズを実際には私の兄弟姉妹であると感じさせる」と語る。また、Afnan (仮名) は、「私は輪廻の教義のために、世界中のドゥルーズに強い愛着を感じている。この信仰は私たちドゥルーズ同士を血によってつなげる。なぜなら私たちはことによったら、前世で同じ一家だったかもしれないからだ」と同様に語る。

一見非宗教的な人物であっても、自らのアイデンティティーにとって輪廻転生が重要だと答えている。例えば Imad (仮名) は、「輪廻転生は私に大きな影響をもたらしていると考えている。私は他の宗教的な事柄には何のつながりもない。例えば、預言者やイード (訳者

---

<sup>7</sup> 宗教社会学は経験科学であるため、この世の外の存在がこの世に介入してくることがないことを前提としている。そのため、輪廻転生について分析するにあたって、その信仰が人間の行為および社会にどのような影響を与えるかのみ注目する。

注…ドゥルーズで崇敬されている預言者の聖者廟への参詣日や、イード・アル・アドハーやイード・アル・フィトルなどの祭日のこと)は私はほとんど全く気にしていない。輪廻への信仰で私のドゥルーズ信仰の9割を占める」と語っている。このように輪廻についての信仰を語っているのが、異なる信仰を持つ同級生たちと共に、日々学業にいそしむ大学生たちであることに留意してほしい。

そして、学生の中には、「前世の記憶」を語る親族について触れたものもいる。例えば Afnan は、「私の弟は4歳の時に他の家の子供だったと語り、その人の名前を話した。私の両親が彼の言ったことを確かめ、相手の家族も弟が話していることが真実だと確認した。いまではその家族は弟をその家の子供として扱ってくれる。私たちが同じ一族であるかのように、私たちの家族とその家族は親しくなった。これが私たちにとって特別なことだ。私たちは死に際して、他のドゥルーズの家に生まれ変わることができる。これが私のドゥルーズとしてのアイデンティティーと帰属意識を決定づけている」と述べた (Halabi and Horenczyk 2019, 7-9)。

#### 4. 輪廻転生と「前世の記憶」を巡る語り

先述のような「前世の記憶」を巡る語りは、国を超えてドゥルーズの社会ではしばしば見られる。語り始めるのは、多くの場合子供である。いったいドゥルーズ集団の何割が「前世の記憶」を自分自身が持つと語っているのかについて、正確な統計はない。しかし、レバノンのドゥルーズの村落の学校の12-14歳の生徒のうち1割は「前世の記憶」を持っていると語っていると Littlewood は報告している (Littlewood 2001, 219)。

そして、思い出される記憶の多くは悲劇的な死を遂げた若者であることが多い。例えば、Dwairy が紹介している、イスラエルの Majid (仮名) の事例<sup>8</sup>を紹介したい。Majid は5歳のころに感情的に不安定になり、しばしば泣き出すようになった。そして、家族に前は3人か4人の家族の父親であったが、事故で亡くしてしまったと語った。家族はこれを真剣に捉え、Majid にさらに質問を重ねた。そして、Majid は彼の父親に車で「過去の家」に連れて行くよう頼んだ。

父親はこう語る「私たちは三回目のドライブで私たちが家の近くに来ていることがわかった。しかし、彼は正確な場所を示すことはできなかった。私はどうしたらよいかわからなかった。しかし、一人の年老いた男が近づいてきた。Majid は老人に前世での家を探していると告げた。すると、老人は『もしかして君は Salman か?』と尋ねた。すると Majid は『そうだ、僕が Salman だ』と答えた。老人は Salman の息子を連れてきて、Majid はすぐにその子供を自分の子供と認めた」。

Salman の自動車事故による悲劇的な死は、すでにドゥルーズのコミュニティーで広く知られていた。Majid の語りはすぐに Salman の村中に知れ渡り、話題となった。しかし、家族はさらなる証拠を求めた。Majid はその時のことをこう語っている。「彼女は、僕が昔彼女の夫だったことを信じなかった。なので証拠を求めた。僕が戸棚の鍵が瓶の下に隠してあ

---

<sup>8</sup> この事例は、Majid 本人および家族への聞き取りに基づいて再構成されたものである。

ることを示すと、彼女は驚いていた。彼女は僕が昔夫だったことを納得すると、彼女は歌い踊り始めた。彼女はおいしいごはんを用意してくれた。前世の父さん母さんは泣いてハグしてくれた。彼らは僕を愛してくれた。それから彼らは僕のところによく来てくれる」。

そして、Salman の家族は Majid が見つかったことを祝って盛大なパーティーを執り行った (Dwairy 2006, 34-35)。

このエピソードで興味深いことは数点ある。第一に、前世の記憶を語りだしたとき、聞き手である Majid の父が、輪廻および子供が前世の記憶を語りうることを疑っていない点である。Salman の家族も本当に Salman であって、嘘をついているわけではないのか疑いはするものの、輪廻という現象が起こりうるということと、前世の記憶が語られることがありえることは一切疑っていない。Dweiry は他にも数件のケースを紹介しているが、いずれのケースでも輪廻が起こりうることを疑った者はいなかった (Dwairy 2006, 29-53)。これは輪廻信仰が強く共有されていることの証拠と思われる。

そして、Majid と父の記憶は懐疑的な視線で見つめるといくつも不自然な点がある。例えば、老人が教えてくれるまで Salman の家に Majid はたどり着くことができなかった。そして、Salman の妻が Majid を元夫と認めたことも、「鍵が壺の下にあることを言い当てた」という事実のみである。鍵が壺の下に隠されることは一般的なことであり、とても証拠とは言えない。にもかかわらず、Majid も父も Salman の家族も等しく Majid が輪廻したことを認めている。

たとえ不自然な証言であっても、人間が世界を意味づけることを欲するという神義論の観点から考えれば、輪廻を遺族の家族が認めることは自然である。遺族は親しい人が子供に輪廻したと信じることで、ドゥルーズの規範の枠組みの中で、彼らの深い苦しみに答えが与えられる。Dweiry が発見したケースの中で共通点として、ほとんどの場合前世の家族は「前世の記憶」を語る他の家の子供を歓迎していることが挙げられているのは、その証左である (Dwairy 2006, 29-53)。

また子供の側の親もしばしば子供に前世を語らせようとする。例えば、3歳の時に前世を語り始めた A のケースを見てみよう。A の母は「Aは何回も Thalah や Nawa と言っていました。彼は小さかったので、滑舌もよくありませんでした。私たちはそれが Saleh と Nawal かと聞きました。Aはそうだよ、と答え、息子とお嫁さんだよ、と言いました」と証言している (Dwairy 2006, 38)。

幼児が意味不明な言葉を話すことは、よくあることである。しかし、このケースでは、子供がきっと前世での家族の名前を語っているに違いないという予断を親が持ったうえで質問を行っている。ここには、前世の記憶を語らせたいという強い意志があると考えられる。

親は多くのケースにおいて、近隣で悲劇的な死を遂げたことがすでに話題となっている人物が、その子の前世であるかもしれないという予断を持ったうえで前世に関する質問を行う (Dwairy 2006, 29-53)。宗教的な言説の次元では、突然の死を遂げた人物は自らの死が訪れたことをすぐに納得することができない。そのため、魂は自らの前の肉体に戻りたい



と考える。そのために、「前世の記憶」を語りだすのだと言われる (Littlewood 2001, 217)。

これが「前世の記憶」がおそらく悲劇的なものであるだろうという予断を持つ背景にある。時にはイスラエルで、国境を越えてレバノン内戦で亡くなった「前世の記憶」を思い出すケースが報告されていた。このことも宗教的な言説がもたらす予断が背景にあるだろう。

「前世の記憶」を語ることはドゥルーズに限られたことではない。そのことは、欧米各地の生まれ変わりの証言の事例について研究したイアン・スティーヴンソン博士の研究からも明らかである [イアン・スティーヴンソン 2005]。しかし、欧米ではそのような言説は社会全体に共有されているものではない。一方、ドゥルーズ社会では人の生まれ変わりを肯定する言説が社会全体に共有され、再生産され続けている。

親は前世の記憶を思い出させることによって、その悲劇的な死を遂げた遺族と親しい関係になることができる。そのことは時に大きな社会的・経済的メリットをもたらす。例えばレバノンの事例では、輪廻転生前の遺族の側の親が、転生後の娘の大学進学のための学費を援助するケースも報告されている。また、思い出される「前世の記憶」の家庭が大体の場合現在の家庭より豊かであることは、現地に住むドゥルーズ自身も認めている事実である (Littlewood 2001, 213-222)。

そして、メリットをもたらさない記憶を子供が思い出したときは、親はその記憶を語らせないようにし、忘れさせようとする。例えば、先述の Majid の妹が望ましくない「前世の記憶」を思い出したとき、Majid の母はそれを語らせないようにしようと努めた。

Majid の母は Dweiry に「私の娘は小さかった時、別の家の子供だったけど、前世のお兄さんが私のことを殺してしまったのよと語った。私たちは私たちの家の評判に傷がつくことを恐れました。なぜなら、娘が前世の兄に殺されたということは、前世で彼女が婚外の性交渉を行い、そのことで前世の家族に不名誉がもたらされたのだろうということの意味するからです。私たちはその記憶を誰にも言わないように命じました」と語っている (Dwairy 2006, 36)。

東アラブの文脈では、女性の婚外性交渉は大きな不名誉とされ、行った女性に対する名誉殺人は時に正当化される。例えばヨルダンで行われたアンケートによると、10代の若者の3割強が名誉殺人は支持できると回答した (CNN 2013)。そのような前世の記憶が暴かれることは、社会での評判を悪くする。また、仮に彼女が語るような前世の家族が特定されたとしても、その家族と良好な関係を築くことはまず期待できそうにない。そのことが、Majid の母が子供に前世の記憶を言わないように命じた背景である。

このように、子供が「前世の記憶」を語り始めたとき、それを肯定的に捉えるか否定的に捉えるかは、親の側の利害によって変わってくる。しかし、この場合でも強調したいことは、子供が輪廻する前の前世の記憶を語りうるということ、および人が輪廻するということが、どのような利害関係にあらうとも疑われていないということである。

ヴェーバーは「世界像」を電車の進路変更をする転轍手に例え、利害や利益を機関車に例えたが、この場合もこのたとえは有効である。「ドゥルーズは輪廻転生する」という世界像

があり、そのうえで輪廻を語る子供をどう処遇するべきか、利益に照らし合わせて考えているのだ。

## 5. 輪廻転生と内婚制

魂の数が一定であり、その限られた魂がドゥルーズのコミュニティーの中で生まれ変わっていくとする輪廻転生の教義がもたらす帰結は、この世に生きるドゥルーズの数は常に一定であるという観念である。

しかし、経験的にはドゥルーズの集団の人数は増減する。そのことは、中国やインドに自分がドゥルーズであることに気づいていないドゥルーズがいるという言説や、アメリカ大陸に移民したドゥルーズもいることで説明されている (Littlewood 2001, 216)。つまり、そのような自分たちには知りえないドゥルーズのところに輪廻する者もいれば、自分たちに知りえないドゥルーズから近いドゥルーズに輪廻する場合もあるに違いないと考えているのだ。

このことは、ドゥルーズの魂の数が一定であるという主張は宗教的テキストにただ書かれているだけではなく、人々に広く共有されていることを示すものでもある。そして、ドゥルーズを離れたものの魂は、永遠に失われてしまうと考えられている。また、離教によってのみドゥルーズの魂は失われ、そしてその結果ドゥルーズの信徒数が減ると考えられている (Bennett n. d., 147)。

ドゥルーズは他の十二イマーム派やイスマーイル派などの宗教的少数派と同様に、宗教的迫害の中であれば偽って棄教を表明することは許容している。シリア内戦の中では、ドゥルーズはイスラーム主義者によってスンナ派への改宗を強要された事例もあった [Shoufi 2013]。しかし、宗教的迫害が去った後は再びドゥルーズに復帰することを許されており、棄教したとはみなされない。

しかし、ドゥルーズ以外との結婚は確実な棄教と見做される。ドゥルーズとドゥルーズ以外との結婚は認められておらず、ドゥルーズへの改宗も認められていないため、ドゥルーズと他宗教の信徒が結婚した場合、ドゥルーズの側は相手の宗教へと改宗するほかはない。

シリア・レバノン・イスラエルのどの国であっても、ドゥルーズを離れ他宗教の信徒と結婚したものはほとんどの場合棄教者として、絶縁を言い渡される。外婚のタブーについて、シリアに関しては、Bennett が、レバノンに関しては Littlewood がフィールドワークに基づいた優れた研究を行っている。

イスラエルにおいては、Falah が非ドゥルーズと結婚したドゥルーズの男性 17 名に対してのインタビュー調査を行っている。彼らは全員が自分の出身の村を離れて生活していた。

ほとんど全員が両親とは絶縁状態にあった。例えば、Yusuf (仮名) は「結婚の前はそれほど大きな問題はなかったのに、結婚の後は物事はずいぶん難しくなった。私は家族から勘当された。特に母さんとは 15 年以上話していない。父さんが亡くなり、兄さんが肺病にかかった後に一人で葬式に行った。私は母さんと話そうとしたけど、母さんは私を見ることさえ拒否した」と語る。Fuad (仮名) は、「両親、特に母さんは私を絶縁し、もはや自分を彼

女の息子と考えることはないと言った。兄さんの何人かはいまでも自分に電話してくるが、何人かとは絶縁している。私は相続から排除された。それは私は大丈夫だ。しかし、私の母さんが癌にかかっている、私はそばにいてやれない…とても心が痛む」と語る (Falah 2018, 76-77)。

そして、ドゥルーズ以外と結婚しようとしているカップルへの助言をインタビューが聞いた際、ほとんどが沈黙したが3名だけが答えた。Yusuf は「私は結婚しないことを勧める。多くの苦しみを生むその愚かな考えを捨てるんだ」と答えた。Fuad は「結婚行きの電車が発車する前に降りるべきだ」と答えた。Magid(仮名)は、「それがいいことかはわからない。それは主観的なことだからだ。どんなに苦しいものであれ、天国への道は善意で舗装されている」と答えた (Falah 2018, 79)。このように、誰も結婚することを直接勧めようとする者はいなかった。

なお、Falah は非ドゥルーズと結婚した女性に対しては、そのような女性を探し出すこととインタビューを依頼することの難しさを理由に断念している (Falah 2018, 75)。このことは、女性の行動の自由が男性と比べ限られているがゆえに、外部との男性の接触が少ないことが一因と考えられる。さらに、非ドゥルーズと結婚した女性への目線が男性に比べてもさらに厳しく、完全に元の家族から絶縁し出身を隠し生きていくことを余儀なくされていることも一因にある可能性がある。

このように、内婚制のタブーを破ることによってドゥルーズは厳しい制裁を受ける。この事実は、より大規模な内婚制のタブーに関する調査結果とも合致するものだ。イスラエルのドゥルーズの事例を紹介したい。アメリカの Pew 研究所はイスラエルの 871 人のイスラーム教徒、468 人のキリスト教徒、439 人のドゥルーズの成人に対する大規模な調査を行っている。「子供がユダヤ教徒/キリスト教徒/イスラーム教徒と結婚したら不快<sup>9</sup>か？」という問いに、ドゥルーズの 87%が対ユダヤ人との結婚に「不快」、85%が対イスラーム教徒の結婚に「不快」、87%が対キリスト教徒との結婚を「不快」と答えた。

この数値自体は他のイスラーム教徒やキリスト教徒に比べて際立って大きいわけではない。イスラーム教徒はユダヤ人と子供が結婚することを 82%が不快、キリスト教徒と結婚することを 75%が不快と答えている。そして、キリスト教徒は、ユダヤ教徒と子供が結婚することを 88%が不快、イスラーム教徒と結婚することを 80%が不快と答えている。

しかしながら、ドゥルーズは他宗教と異なり、1割以上がこの質問に対して回答することを拒否している。この態度は、ドゥルーズの多くにとってこの質問それ自体が、問われることを全く想定しないような禁忌に関する事柄<sup>10</sup>であることを示していると考えている (Pew Research Center 2016, 215)。

---

<sup>9</sup> 原文では **Uncomfortable**

<sup>10</sup> 恋愛や結婚に関する禁忌は、ドゥルーズのみならず世界中に存在する。現代の日本人に、仮にインセスト・タブーに触れる経験があるかどうかについて聞いたとしたら、同様の反応を示すものが多いだろう。

また、配偶者の出身宗教についての質問では、99%以上のドゥルーズがドゥルーズと結婚しており、イスラエルの他のどの宗派集団より内婚の割合が高かった (Pew Research Center 2016, 211)。

ここからは、輪廻転生の観念と結びついている内婚制の規範と、外婚の禁忌を犯した者への制裁が極めて強いがゆえに、内婚の割合が極めて高くなっているという図式が読み取れる。

## 6. 結論

本稿ではドゥルーズの輪廻転生と社会とのかかわりあいについて概観した。ドゥルーズは一神教の枠内での生まれ変わりを説くため、一見してマニ教と類似したものに見えることがあるが、実際は大きく異なる。

マニ教にとっての輪廻転生は、この世および肉体的なものが悪であり、霊魂の善であることと結びついた思想であった。マニ教においては、肉体的なものが悪であることから、生殖と結婚もまた悪であると考えており、聖職者の結婚は許されなかった<sup>11</sup> [加藤九祚 1993, 254]。

しかし、ドゥルーズにとっての輪廻転生はそれとは異なる。前述の通り、家族を亡くした遺族が、この世で再び「転生した故人」を見つけたと信じることもあり、それによって遺された遺族の精神的な苦しみは和らぐ。マニ教のように肉体が悪であるという教義を持っていれば、宗教的には故人の死を悪である肉体からの解放として喜ぶべきと考えるであろう。しかし、マニ教と異なり、ドゥルーズはこの世が悪であるという教義を持たない。また、結婚も肯定的に捉えられるべきものであるとしている。

このように、ドゥルーズの教義の中で現実の世界で起こる出来事と救済は強く結びついている点が、マニ教と異なる。このように、現実の出来事を無視せず、意味のあるものであると考えたことは、コミュニティーの維持に強く貢献したと考えられる。それは、マニ教と異なり、ドゥルーズのコミュニティーが今に至るまで存続し続けた一因であるとも考えられる。

## 引用文献

Abu-Izeddin, N.M. *The Druzes: A New Study of Their History, Faith, and Society*. Leiden: Brill, 1993.

Armanet, Éléonore. " 'Allah has spoken to us: we must keep silent.' In the folds of secrecy, the Holy Book of the Druze." *Religion* 48, no. 2 (2018): 183-197.

Bennett, Marjorie Anne, . *Reincarnation, marriage, and memory: Negotiating*

---

<sup>11</sup> マニ教の一般信徒は結婚はできたものの、善行を行い、来世で聖職者に生まれ変わることが望ましいと考えられていた。

- sectarian identity among the Druze of Syria*. PhD thesis, Arizona: The University of Arizona, n. d.
- CBS. *The Druze Population of Israel 2022*. 4 24, 2022.  
[https://www.cbs.gov.il/en/mediarelease/pages/2022/the-druze-population-of-israel-2022.aspx#:~:text=Media%20Release,-24%20April%202022&text=At%20the%20end%20of%202021,Israel%20\(14%2C500%20in%201949\)](https://www.cbs.gov.il/en/mediarelease/pages/2022/the-druze-population-of-israel-2022.aspx#:~:text=Media%20Release,-24%20April%202022&text=At%20the%20end%20of%202021,Israel%20(14%2C500%20in%201949).). (accessed 10 26, 2022).
- CNN. 「名誉殺人」、若者も支持 中東ヨルダン. 6 21, 2013.  
<https://www.cnn.co.jp/world/35033690.html> (accessed 11 03, 2020).
- Dwairy, M. "The Psychosocial function of Reincarnation among Druze in Israel." *Cult Med Psychiatry* 30, no. 1 (2006): 29-53.
- Falah, Janan Faraj. " "He Is Alienated" : Inter-marriage among Druze Men in Israel." *Sociology Mind* 8 (2018): 70-82.
- Halabi, Rabah, and Gabriel Horenczyk. "Reincarnation beliefs among Israeli Druze and the construction of a hard primordial identity." *Death Studies*, 2019: 1-10.
- Littlewood, Roland. "Social institutions and psychological explanations: Druze reincarnation as a therapeutic resource." *British Journal of Medical Psychology* 74 (2001): 213-222.
- Makarem, Sami Nasib. *The Druze Faith*. New York: Caravan Books, 1964.
- Nigst, Lorenz. "Being One and Two and Druze: Problems of belonging in the remembrance of previous lives." *International Forum on Audio-Visual Research Jahrbuch des Phonogrammarchivs*, 2017: 56-81.
- Pew Research Center. *Israel's Religiously Divided Society*. Pew Research Center, 2016.
- ShoufiZina. Zaman al-Wasl. 2013 年 12 月 25 日 .  
<https://www.zamanalwsl.net/news/article/44713> [アクセス日: 2020 年 11 月 08 日].
- W.S. Oppenheimer, Jonathan. " "we are born in each other's Houses": communal and patrilial ideologies in Druze village religions and social structure." *American Ethnologist* 7, no. 4 (1980): 621-636.
- イアン・ステューヴンソン. 前世を記憶する子どもたち 2: ヨーロッパの事例から. 東京: 日本教文社, 2005.
- ピーター・L・バーガー. 聖なる天蓋: 神聖世界の社会学. 東京: 筑摩書房, 2018.
- マックス・ウェーバー. 宗教社会学. 翻訳者: 武藤一雄, 園田宗人, 園田坦. 東京: 創文社, 1976.

宇野昌樹. イスラーム・ドルーズ派:イスラーム少数派からみた中東社会. 第三書館, 1996.

宇野昌樹. “イスラームと輪廻転生観:タナースフ及びタカンムスに見られる輪廻転生.”  
オリエント 38 [1995]: 88-102.

加藤九祚. “マニ教研究ノート.” 創価大学人文論集(5), 1993: 242-263.